

預かり屋です。どうな
さいますか？

茶介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガラル地方のワイルドエリアにある「預かり屋」

僻地にひっそりと佇む隠れた名店。

知る人ぞ知るお店を営むのは1人の若いポケモンブリーダー。

ポケットモンスターソード・シールドの世界を舞台に彼はどんな物語を紡ぐのでしょうか？

こんにちは！

預かり屋です。どう なさいますか？



▼オリ主が原作キャラと関わって悩んだり成長したりおせっかいしたりするお話です。

▼本作ではポケモン世界に関する独自解釈・設定、および原作キャラ同士のCP要素を含みます。

3 2 1
話 話 話

--	--	--

23 13 1

目次

1話

まずはじめに「預かり屋」というお店をご存知でしょうか？ いえ、よく間違われませんが「育て屋」ではありません。この場所、ガラル地方以外の地方ではそちらの方がメジャーなようですからね。

私の仕事でもある「預かり屋」とは。

初めてご来店されるお客様には「みなさんのポケモンを預かってお世話をする所」と説明をさせて頂いています。

具体例をあげていきますと、他の地方にご旅行される際に環境保護などの観点からその地方に生息していないポケモンの持ち込みなどを一部制限されている場合がございます。

そのような場合に、ポケモンセンターや研究所などへボールに入れた状態で預けるのではなく伸び伸びと過ごさせてあげたいというお客様に代わって、日々のお世話をさせて頂く施設です。

それ以外にもコンディション調整の為や療養、捨てポケモンの保護、時にはポケモンセンターからの委託で産卵の補助をすることもあり、一般的な認知よりか実務は多岐に

渡ります。

そしてその従事者が主に私のような『ポケモンブリーダー』と『ポケモンドクター』です。

『ポケモンブリーダー』

一言で表すならばポケモン育成のプロでしょうか。

ポケモンが健やかにどんな成長をしたいのかを汲み取り、それぞれに合わせた成長の手助けをする専門家です。

私はこの仕事に誇りを持っています。そして、ポケモンたちを愛しています。

おしゃれ好きな子が魅力を最大限に引き出せるように、バトル好きな子が上手く戦えるようになった時の喜びは何にも変え難い……。

もしご興味があればぜひ一度、店舗までいらっしやったださい。ポケモンを預けなくても、ポケモンと生活する上でお困りのことなどのご相談も承っております。

その際には私たちの仕事お決まりのお言葉でお迎えさせていただきます。

「こんにちは！ 預かり屋です。どう なさいますか？」ってね。

※

ある日、私はとある女性から「今日お店行くから」と連絡を貰いました。それも日が昇ったばかりの時間にです。なんでも頼みたいことがあるとのことだったので、預かり屋の外へは出ずに店内でできる事務処理を進めていました。

うつすらと木目が見えるライトブラウンを基調とした穏やか雰囲気の内店は、自分でいうのもおかしいですがお気に入りです。

店内にほどよく流れるマイナーリーグの中継と淹れたてのコーヒーが退屈な事務処理を助けてくれます。ポケモンたちと触れ合っていた方が楽しいですが、お店を続けて行くにはこれも大切な仕事と割り切るしかありません。

時間は刻々と過ぎていき、来店を告げるベルが鳴ったのは、丁度お昼時に差し掛かった時でした。

入り口の真正面に構えたカウンターに座る私を彼女が見つけるのは一瞬。緑色のニットにデニムを使ったヘソ出しコーデに身を包んだお洒落な女性は、軽く手をあげてカウンターまで歩み寄る。

「やつほーテリスくん。久しぶりじゃん」

「久しぶりですねソニアさん。もっと頻繁に来てくださってもいいんですよ?」

「ワイルドエリアにお店があったらそう簡単に来れないでしょ」

「それはごもつとも」

笑いながら軽快に挨拶を交わす彼女はソニアさん。つい最近ポケモン博士として正式に認められた私の昔馴染みです。直接会うのはおおよそ一年振りですが、以前の快活な様子は相変わらずで安心しました。

しばらく会っていないなかった理由はいくつかありますが、私が仕事柄あまり長い時間お店を離れられないことと、このお店の立地によるところが大きいでしょう。

彼女の言葉にあるように私の運営する「預かり屋」はワイルドエリアの中にある。敷地だけを保有しているとかではなく文字通り、そこに建っています。エリア内に存在し、かつ今現在でも使用されている建物がうちだけだと言えば特異性は想像できるでしょう。

そもガラル地方本土のかなりの面積を占めるワイルドエリアはたださえ天候不安定なものにも関わらず、広大で迷いやすい。極め付けに強い野生のポケモンがうじゃうじゃいるときた。立ち入りにさえ許可がいる特殊な場所です。

そんな場所にあるお店にわざわざ来る人など公的機関や拘りのある方しかいませんからね。

「ワイルドエリアに預かり屋があるなんて知らなかったぞ！ ソニアは凄い人と知り合

いなんだな!!」

そしてソニアさんの後ろから店の中に入ってきた少年が声をあげます。元チャンピオンを彷彿とさせる顔立ちの少年の姿に思わず口元が緩みます。

……立派に成長したものだ、と思う。

この少年、ホップくんのことを私は知っています。

いえ、彼は数ヶ月前に起こったとある大事件からガラルを救った英雄として誰もが知るトレーナーとなっていますが、そういう意味ではなく……。

「ははっ、凄い人と言われると照れますね。でも私たちも一応、面識はあるんですよ？」

ホップくん？」

「ええっ!? そうなのか!」

隣でコロコロとソニアさんが笑っているのを見るに、私のことを説明もしていなかったのでしょうね。

「私もブラッシータウン出身ですからね。それに私はソニアさんと君のお兄さん、ダンデといっしょにジムチャレンジに旅立った同期でもあります」

「兄貴たちの同期!?!」

本当にいい反応をする子ですね。見ていて面白いです。確かにこれは揶揄いたくなくなる気持ちも分かります。ソニアさんに至っては彼の反応が面白いのか、目に涙を浮かべ

るほど大笑いをしているほど。

「あはははっ！ ホップつてば想像通りいい反応するじゃん！」

「ソニア！ そんな人がいたなんて聞いてないぞ！ 教えてくれても良かったのに！」

まあ彼が覚えていないのも無理はありません。最後にホップくんに出会ったのは私たちがマグノリア博士からポケモンを貰い、旅立った時。つまり今より10年以上前です。

ホップくんに至ってはまだ幼児。ダンデと離れるのが嫌でぐずっていた子がガラルの英雄と呼ばれるほど立派になっているのはほんとうに感慨深いですね。

「改めまして、私はテリス。彼女たちの同期で今はしがなない預かり屋さんです。以後よろしくお願いします」

※

さて、と話題を変えるために少し強く言い放つ。立ち話もなんだからと脇にある応接スペースに促し、全員が腰を掛けたのを見計らい本題へと移ります。

「頼み事があるとのことですが、ホップくんを連れてきておくことも関係あるのですか？」

「そっ！ 察しが良くて助かるよ！ 頼みっていうのはホップにテリスくんの仕事を見学させてあげてほしいの」

「お、お願いしますっ！」

詳しく話を聞くと、ホップくんは今ソニアさんの元でポケモン博士を目指して助手として勉強中。勉強熱心ということもあり、徐々に知識は付けてきているもののまだまだ知識が偏っている状態とのこと。

そこで様々なポケモンが集う預かり屋さんの性質を利用し、自分の目でブリーダーの仕事を見ることで経験を積もうという考えのようですね。

確かに書籍などで知識を集めるより実習形式の方が定着もしやすいでしょう。加えて本来生息地が異なるポケモンが集まるここならば広範囲を移動する必要もなく、色んなケースを学べる。理にかなった方法です。

ですがー

「悪いけどソニアさんの頼みであつても簡単に了承するわけにはいきません」

「ダメかあ……」

目に見えてガツクリとするホップくんに対し心が痛みます。が、預かり屋という仕事を営んでいる以上、責任というものがある。

「すみません。ですが君はまだ若い。経験を積む時間も方法も選択肢はいくらでもある

でしょう」

おいうちまでと重ねた私の遠回しの拒絶が沈黙を誘う。お互いに気持ちを整理するためにも一度私は席を立ち、カウンター裏に備え付けてあるキッチンでコーヒーマシンの淹れ器に淹れられたコーヒーを淹れることにしました。

ソニアさんの「こうなるような気はしてた」とでも言いたげな苦笑が気になりますが、今は置いておきます。

断ったのは何も彼らを信頼してはいないわけではありません。ソニアさんのことは良く知っていますし、ホップくんも悪さをするような人間ではないでしょう。

それでも、うちで預かっているポケモンたちの中にはデリケートな事情を抱えている子たちもいます。そも他の人の大切な家族を預かっていると他人を野放しにする訳にもいきません。

私が常についていればいいのかも知れません。しかしそうすれば多少なりとも業務の内容を彼がいる前提のものに変更しなければなりません。フィールドワークを目当てに来ているのに私が事務処理をしているわけにもいけません。

応援はします。力になってあげたいという気持ちも嘘ではありません。

さりとて杞憂であったとしても僅かなリスクを背負ってまで手伝う理由にはなりません。

「テリスくんほんとにダメ？」

簡易的なドリッップコーヒーを抽出している途中、私の思考の切れ間に合わせたようにキツチンの入り口からソニアさんが顔を覗かせました。

「……一応、裏は関係者以外立ち入り禁止なんですが……」

「えー前にも入れてもらったことあるんだからいいじゃん」

で、どうなの？ と距離を詰めて直接聞いてきてはいますが、聡明な彼女のことですから、お断りする理由くらいはおおよそ分かっているでしょう。

実際、つい先ほどまで考えていたことを要約すれば「予想通り」といった表情。そして、淹れ終わったばかりのコーヒーを一口すすり先ほどより真剣な表情で私に向き合いました。

カップに口をつけたのは喉を潤す為というより口を湿らす為でしょう。出来ることなら余り口にしたくない言葉が少しでも滑らかに出るようにする為に。

「あの子さ、私たちとおんなじなんだよね」

ポリウームを落としたその一言で彼女の言いたいことを理解しました。

「同じ……ですか」

「そつ。そんな子が頑張ってるんだよ？　ちよつと鼻肩して応援してあげたくもなつちやうじゃん？」

あなたもそうでしょ？　暗に彼女はそう言っている。

「わがままですね」

「そうだね。だからこれは私の自己満足」

「私たちも最後の一步を踏み切れていないのに？」

「だからこそじゃない？」

挨拶した時のような小気味よいテンポで、ただその時のような快活さはない問答。間違ひなく私たちの脳内には苦くてとても大切な思い出が思い起こされていたでしょう。

「ね、お願い」

その言葉を最後に再び沈黙が流れました。コツ、コツと鳴る時計の振子がやけに大きく感じられる。

ソニアさんの言葉は私にとって、この話を承諾するか再考するほどには大きな意味を持つものでした。理由は彼女と同じ自己満足でしかありませんが……。

ホップくんを一人待たせています。あまり時間をかけるわけにはいきません。けれども考えは纏まらず、行き場のない感情を代弁するかのように指がカップの縁を弾く。

「……あーあ、受けてくれたらジョウトから取り寄せた美味し〜いお酒、お礼にしよう
と思っただけだなあ」

カップの甲高い音が合図だったかのようにソニアさんが口を開く。暗くなっ
てしまった雰囲気はきりはらうかのように少し声のトーンを上げながら、ちらりと横目で様
子を伺っていた。

「……物で釣る気ですか？」

「考えすぎるテリスくんには丁度いい言い訳でしょ？」

まあ私のことを良く知ってらっしゃいますこと……。

そうこれは彼と自分を重ねているのではない、物の誘惑に負けたんだ、というソニア
さんが用意した逃げ道。それに対して私は――。

「仕事に余裕のある時でよければ」

彼女に手を差し出した。

その後、テーブルに戻って話を承諾したことを伝えると、事態の変化に驚きながらも
ホップくんは喜んでくれた。

ただし意見を一転させた理由を聞かれた時のソニアさんの「お酒で釣った」発言に対する「だ、ダメな大人だぞ」という眩きと少し冷めた目線はしばらく頭に残りそうでした。

2話

何度も言う通り私の「預かり屋」はワイルドエリアの一角、ハシノマ原つぱと呼ばれる区域の最果てに位置します。土地面積でいえばかなりのものですが、その大半はポケモンをお世話するための庭。建物自体はごく普通の木造2階建に過ぎません。

一階はお店、二階は居住スペースとして区別もしています。といってもお風呂やキッチンには共有物としてしているほど大味なものが。

「これタタミってやつだろ？ 本で見たことあるぞ！」

「ジョウト地方に行った時気に入ってね、上の階はジョウト風にしてあるんだ」

独特だけど落ち着く匂いだ、と話すホップくん。不快ではないようで良かった。

「テリスくんありがとうね。お願いだけじゃなくて泊めてもらっちゃって」

「大したことじゃないですよ。それにあわよくばと思ってもいたでしょう？」

「あつバレてたあ？」

「何年の付き合いだと思ってるんですか」

私がお酒で手のひらを返す男という汚名を頂戴したのち、私はソニアさん達を二階へと案内していました。

というのも、ホップくんがどんなことを知りたいのか、いつ見学できそうかと話すうちに、彼女たちがワイルドエリアの滞在期間を2日と申請していたことが分かりました。そこで、どうせならうちに泊まって明日、見学しようという話の流れになったのです。

まあ、ソニアさんがうちに来るときはいつも泊まっていくので今回も同様になるだろうと予想はしていましたが。

歩けば音を鳴らして軋む板張りの廊下。右手には壁と窓のみで、部屋は左手にある居間と、廊下のどん詰まりにある計二部屋のみ。わずかに開いた襖から畳が覗いています。

奥の部屋は私の部屋というわけではなく、週に2回ほど手伝いに来てくれる叔母さんが泊まることを主な目的とした客間です。

そのためほとんど使われない空き部屋同然の部屋となっています。

ソニアさんのように稀に遊びに来て、そのまま泊まっていく人にはそこを使ってもらうのですが、今回は2人。まして恋人でもなんでもない男女となれば、そこは女性であるソニアさんに使ってもらい、男性陣は居間で雑魚寝が妥当でしょう。

そのことを伝えると2人とも異論はないようで快く頷いてくれた。ソニアさんは慣れていますが、ホップくんははじめての場所にも関わらず、緊張するどころかその場を

楽しんでる様子が垣間見えるよう。

やはり好奇心が旺盛なのか。ポケモン博士とはこういう人に適正があるのでしょうか。

「ひとまずは荷物を置いてゆつくりしてください。事務処理と電話を一本かけたら声をかけます」

そう言い残し1人、私は踵を返す。

ホップくんの知識を増やし、興味を深めるために少ない時間で何をするかは事前にソニアさんと打ち合わせ済み。そちらに思考を割く必要は今ありません。

降りるのにも神経を使う急勾配な階段を、慎重に降りながら、私は電話相手への文言を考え始めました。

※

デスクワークが一息ついたのは15時頃でした。

思いの外待たせてしまったことを謝罪しつつ、2人を裏口へと呼び出した時の反応

はー

「テリスくん何それ!? そんなの初めて見た!!」

「かつこいいいな!! テリスさんは珍しいものを沢山もってるんだな!」

ーという具合でした。

私たちの目の前にあるのは、異形のバイク。

エンジンの入っている鼻先は長く、車輪は後輪のみ。サイドカー底部についている円盤からは僅かに風が吹き出しています。

「これはロトバイク。オーレ地方にあるホバーバイクをロトムが制御できるようにした物です。いいでしょう?」

後輪以外が宙に浮くこのロトバイクは私がワイルドエリアを周る際に重宝しているものです。

昼以上に食いつきの良いホップくん思わず笑みが溢れます。こういうものに目を輝かせるあたり、この子も男の子ですね。

閑話休題。

「さて、ホップくん。君はこれまでどんなポケモンを育ててきましたか?」

「えっと、ウールーにゴリランダー、アーマーガアにウツウ、オーロット……それから……」

2人をサイドカーに乗せ、簡単に敷地を回りながら、ホップくんの育成歴を聞くと、随

分といろんなポケモンを育ててきたようですね。

多くのポケモンに触れているのはトレーナーとしても博士見習いとしても良いことです。種によって生態が大きく異なるポケモンを育てるのにはかなりの手間と知識が必要とされます。

実質、掘り下げて話を聞いてみれば彼の知識は、一般的なものとしては十二分。育てたことのある子達については大変よく勉強しています。

「くさタイプを2匹育てているのはこれからする話にとっても丁度良いですね」

「どういうことだ？」

「ホップに偏ってる知識の話。アンタはポケモンそれぞれについては詳しいけど、博士を目指すならもっと学術的なことを知らなきゃいけないの」

「が…ガクジユツテキ？」

急に出てきた単語に怯むホップくん。

まあ、如何にも難しい話をしますよと言われているようなものです。ガラルの英雄と呼ばれてもまだそういう所は年相応。無理ありません。

「そう身構えなくて平気ですよ。今は『こういう違いがあるんだ』くらいの認識が持てれば大丈夫です」

そこまでの前置きをした上で、私はバイクを止めました。無論、今回の目的地に到着

した為です。多くの木々が密集している林。くさタイプやむしタイプ、ゴーストタイプなどが好む環境を再現した場所です。

先程の話とこの場所から今日のテーマが「くさタイプ」に関係することだと彼も予想がついていることでしょう。

「アップリユール！ いますかー？」

呼び声に応えて木々の中から私の胸の中に飛び込んできたのは30センチ程の小さいポケモン。りんごはねポケモンのアップリユール。

りんごの皮を羽にして飛ぶ、とても小さく愛らしいポケモンですが、とても頼りになる私の家族です。

「きゃー！ アップリユール久しぶりー!! 私のこと覚えてる?！」

胸に頭を擦り付けて甘えていたアップリユールはソニアさんのことを見ると、僅かな空白を挟んで、嬉しそうにソニアさんの腕の中へと飛び込んで行きました。

……この子、ちよつと忘れてましたね。

「そつかソニアはテリスさんの相棒たちとも知り合いなんだもんな」

「そうよーこの子すっごいがんばりやでいい子なの。この林でトラブルがないかいつも見回ってるんだもんねー?！」

偉いね、と頭を撫でるソニアさんに満更でもないアップリユ。甘えたがり、というより撫でられたり、褒められたりするのが大好きな子ですからね。

「ではホップくん。キミが育てていたゴリランダーとオーロット、そして私のアップリユ。この3匹の違いはなんですか？」

これが今回の主題に繋がる問いかけです。

違いと言っても色々あるでしょう。姿形が違えば、たまごグループや複合タイプの有無なども違います。それは多くのトレーナーでも知っていること。求める答えは違います。

ホップくんは思いつく限りの違いを羅列しながら、何を問われているのかを考え唸っています。

「うくん……生態だって違うし、好む環境も違う……あげてたらキリがないし、第一なんでこの3匹なんだ？」

「へえ、いいとこ突くじゃん」

「ええ、ちゃんとその3匹であることに理由はありますよ」

「ソニアは知ってるのか!？」

「私、これでもちゃんとしたポケモン博士なんだけどっ!」

彼はソニアさんのことをどういう目で見てるのでしようか……。尊敬はしているの

でしようけど……。

しかし勘がいいのか、着眼点は悪くありません。今のような考え方ができるのであれば、少しヒントをあげれば自分で気が付くことができるでしょう。

「他に付け足すなら、ロゼリアとタマゲタケの2匹も含めて考えてください」

このヒントでぼんやりとイメージができたのでしょうか。答えが出るのは数分とかわりませんでした。

「植物の種類と生え方……？」

「まあ正解でいいかな」

「そうです。正確にはくさタイプ内で生物学上の分類が異なります。その見分け方が君のいう植物の種類と生え方、そして割合です」

先も言ったようにポケモンのタイプやたまごグループは広く一般的に認知されているものですが、研究する上ではより細かい分類というものが存在します。

ゴリランダーは哺乳類、オーロットは樹木類、アププリューは果実類、ロゼリアは草木類、タマゲタケは菌類。

そのポケモンが植物的要素を含むのか、身体の構造的に動物部分が多いのか、植物部

分が多いのか、それは草花なのか、果実なのか、菌類なのか。判別の基準は多々ありませんが、全てのポケモンにこの「類」という分け方は存在します。

つまりはゴリランダーの場合、研究する上での正式名称はー

『ポケットモンスター くさタイプ 哺乳類 陸上・植物グループ ドラマーポケモン
ゴリランダー 』

ーとなりませぬ。

「あたし達はポケモンの研究をする時にまず見た目からその分類を考えるの。それによつて初めてみるポケモンでも生態の目処をつけられたり、考えを整理できたりすることもあるんだよ」

「私のようなブリーダーはその分類からかかる恐れのある病気を推測したり、お世話する上での注意点を考えるんです」

例えば哺乳類であるゴリランダーは動物的要素が多く体毛など身体の一部が植物になつています。体毛の植物の一部が枯死している場合は髪を切るくらしいの気持ちで切除しても問題ありません。むしろ他の植物に伝播することを抑えられます。

しかしアップリューの場合、身体そのものが果実になつている果実類。植物分類が腐れば文字通り身を削る大手術になつてしまうため予防がより重要になつています。

「そんな分け方があつたのか……」

「ポケモンってそれぞれが特徴的でタイプだけでも十分差別化できるから専門職じゃないところという枠組みってあまり認知されてないんだよね」

聞いたことを熱心にメモをするホップくん。

彼の知識の偏りというのはポケモンという生き物を、各品種で捉えていることに起因するものでした。

つまり彼の知識は点でしかなく、考えるための枠組みができていないのです。枠組みを意識することができれば、彼の知識と思考にはより深みが出ることでしよう。

そして記憶を定着させるには自分の目で見て、実際に体験するのが一番。

アップリューにはホップくんがイメージをしやすいようにいて貰っただけなのですが、アップリュー以外のくさタイプも見てみましょう。

安全にこういう体験ができるのが、私が頼られた理由でもあるでしょうからね。

「記録ができたら歩いてポケモンたちを見にいきましょう。分類を意識してみると色々発見もあるんじゃないですか？」

小一時間かけてみて回った結果、ホップくんにとっては大きな収穫となったようで、私としても手伝った甲斐がありました。

3話

預かり屋に戻ってからホップくんは火が点いたように調べ物を始めました。

いえ、研究や勉強についての熱量は元々高かったのでしょう。ただソニアさんの研究を手伝う過程で、知識を増やしたり、経験するのではなく、明確に自分の知るべきこと、課題が浮き出たことによって身が入る様になったのだと思います。

「彼、凄いですね。青春してるといっつか……少し羨ましいです」

「分かる。私もホップが『夢を見つけた!』って言った時なんか泣きそうになったもん」

居間でホップくんがスマホホロトムと睨めっこをしている間、私とソニアさんは一階で夕飯の準備をしていました。野菜やお肉を切る手こそ止めないものの、久しぶりにあった戦友同士話が尽きることはありません。

「あなたが助手まで持つようになったなんて……なんだかんだ時間が経つのは早いですね」

「まっ、ジムチャレンジから10年以上経ってるからね」

「そんなになりますか……」

事前に3人でポケモンの卵を貰ったこと。

誰が卵を早く孵化させるか競争したこと。

ダンデがとにかく温めれば良いのだと卵を茹でたこと。

初めてバトルをしたこと。

今も仕事を共にする仲間に出会ったこと。

知らない世界を知ったこと。

最後は……別の道に歩むことになったこと。

今となっては良い思い出です。

ジムチャレンジに挑戦した一年に焦点を当てても凄まじく濃い。ジムチャレンジを経験した人は誰でもそう感じるのかと思います。また、そのチャレンジの結果が、人生の転機となることも少なくありません。

「そこで研究者を目指したソニアさんがちゃんと博士となってウチに来てるといのはまあ、感慨深いですよね」

「だね。ワイルドエリアに預かり屋を開くなんて思ってたもんなら」

「私だって旅立った時は思ってたんですけどよ」

かくいう私たちも育成の道を志したのは当時のジムチャレンジ中でした。偶然……運命と呼称してもよい出来事があり私の人生観に大きな影響を受けました。

まあ、今年に限っては1人の人生観どころか地方全体にものが言えますが。

ここ数ヶ月、私が暮らしているガラル地方は転換期を迎えていると言えるでしょう。ガラル神話の解明。

およそ10年、無敗神話を築いていたチャンピオン ダンデの敗北。

それに伴う新チャンピオンの登場。

長年プロリーグで活躍してきたジムリーダーの世代交代。

バトルタワー設立。

これが全て一年にも満たない間になされたとは本当に驚きです。テレビから『だくりゆう』の如く流れる新情報の濃さたるや……。

「その殆どの事柄に昔馴染みが関わっているっていうのはどういう因果ですかね」

「ほんと、ビックリだよね」

私もそう思うと快活に笑いますが、忙しく中々会えなかった人たちが連日テレビで放送されてみると思う。混乱しますよ？ 実害があるわけではないですし、むしろ好ましいことなのですが。

「最近、ダンデには会っていますか？」

「チャンピオン交代した直後くらいかなあ。それからバトルタワーの件で忙しかったみたいで全然。あとまたなんか企んでるっぽい」

そういう話を知っているというのは、頻繁に電話くらいはしているのでしょ。とはいえ、彼らがそういう仲間になったとはまだ聞いていませんし、進展してるのかしてないのやら。

「まあ彼もリーグ運営に直接関わるようになりましたからね」

2人の関係についてはそのうちくっ付くだろうというのが個人的な見解です。後で突っついてみようと思いつつ、話の腰を折らないよう話を繋げる。

「そのうち『ガラルのトレーナーを強くする為、新しいトーナメントを開催する!!』とか言い出しそう」

「ハハッ、それはやりそうだ」

10代から囚われ続けた「チャンピオン」という立場から解放され、以前より自由がきくようになったのです。今はやりたい事がどんどん溢れてきて、一つ一つ形にしているとところなのでしょう。彼がテレビで重大発表をする日も遠くはないかもしれません。

「まっ、後はテリスくんだけだね」

そう考えていると、ふと私へと矛先が向きました。

「何の話です?」

「転・換・期。私は博士、ダンデくんはバトルタワー。残ってるのは……?」

木べらで私を指し示し「ん?」といたずらっ子のように笑みを浮かべるソニアさん。

それが暗に私の悲願達成を祈っているのであろうことは長年の付き合いだからこそ分かります。

触れにくい話題だからこそ、私から言い出さない限り、直接言葉にしないのも彼女なりの優しさなのでしょうね。

「……まっ、店が潰れなければいいですけど」

その優しさに甘え、トンと包丁が話を区切った。

※

「これは……凄まじいな……」

「でしょ？ スイッチ入るといつつもこう。止めないと寝落ちするまで続けるよ」

それはさすがに困りますね。

夕飯の支度もほどほどに、2階に戻ると目に映ったのはレポート用紙の東、東、東。ホップくんが見学してから調べたことをひたすらに書き連ねたものが

テーブルを覆っていました。

彼の熱量は先も言った通りですが、短時間でこれほど調べるのはなかなか出来ることではありません。集中力の為せるわざでしょうか。書いた量がこれ程になっているの

にも気が付いてる様子はありません。

一枚手にとつて見てみると、書かれていたのは左側の「ノーマル」を頂点に「類」に繋がる樹形図でした。またその横には分類の特徴。どうやら自分の手持ちのタイプから大枠を作っていくつもりなのでしょうね。

「……あつ！ ごめん！ すぐ片付けるぞ！」

話し声で私たちに気付いたホップくんが慌てて紙を纏めますが、私はそれをやんわりと押し留める。

「そのままでもいいですよ。この後も調べ物はしたいでしょう」

夕食は外で食べましょうと促し、居間のテーブルはそのままにホップくんを連れて、場所を移します。

納屋からキャンプ用の折りたたみテーブルと椅子を取り出して、店の正面に広げます。経験上、この時間帯にくる人は気心の知れた人ばかりなので、仮に来客があつても問題はありませぬ。

「この匂い……カレーか？」

「ええ、メインはソニアさんに作ってもらいました」

大鍋からは鼻腔を刺激するスパイスの香り。なんとも食欲がそそられる。

身内をのぞいて誰かとの食事自体が久しぶりというのも食卓を彩るアクセントと なっています。

ポケモンたちのであれば話は別ですが、自身の食には頓着がありません。

そんな私が食にワクワクしている。交流の大事さを思い出しますね。

「……テリス君。またなんかややこしい事考えてるでしょ」

……私、そんなに分かりやすいでしょうか。

「まつ、いいけどさ。私が作ったんだからポーツとしないでちゃんと味わってよ?」

「もちろん。ソニアさんが料理上手なのは知ってます。これでも楽しみにしてるんですよ?」

「どーだか。誰かさん曰く手早く食べれるからいいらしいけどね」

「アニキのことか……」

ダンデ、そんなこと言ったんですか。彼としては褒めてるつもりなんですけど、ほかに言いようがあるでしょう……。

「そー!! だいたいダンデくんは乙女心が分かってないのよ! 頻繁に会えるわけじゃないのに、せっかく会えたと思ったらー」

「ストップ。話は食事しながらにしましょう。ほら2人とも手持ちを出して、みんなの分も準備しないといけないんですから」

「ーそれもそうね」

危なかった。

普段サバサバしてる分、ソニアさんは愚痴が始まるとなかなか止まりません。そんなに愚痴を零すタイプでもありませんが、ダンデが関わると特別な感情が作用しているのか途端に溢れ出します。

ダンデと料理の話はしばらく一緒にしない方が良さそうですね。

チラリと横を見るとホップくんが私に向けて親指を立てていました。

別に君のためではないですが、体験済みということだけはわかりました。

「それじゃあバイウールー！ ゴリランダー！ ご飯だぞー！」

「ワンパチもっ！」

2人が繰り出したポケモンたちは合わせて3匹。いくらかのポケモンたちはどこかに預けてきたようですね。

ホップくんの手持ちはひつじポケモンのバイウールーとドラマーポケモンのゴリランダー。ソニアさんはワンパチの1匹のみ。

バイウールーの進化前であるウールーとワンパチは生息域が広く、ゴリランダーは初心者向けポケモンサルノリの最終進化系。どのポケモンもガラル地方では知名度が高い子ばかりです。

さて、面識のあるワンパチや、バイウールの愛され具合がわかる毛並みなどは気になります。私にとって今一番感慨深いのはこのゴリランダー。

「ゴリランダー、お久しぶりです。立派になりましたね」

そう呼びかけると、ゴリランダーは私の顔をしばし眺めた後、目を見開いて抱きついてきました。

「ハハッ、大きくなっても甘えたがりには変わらさずですか？」

頬擦りをする私たちに置いてきぼりのホップくん。まあ、何も知らなければ初対面のはずの人に甘え出す仲間を見たらそうなりますよね。

これに関してはダンデが話さない限りソニアさんも知らないでしょうからね。

「ど、どういふことだ!? テリスさんはゴリランダーを知ってるのか!？」

聞かれて然るべき質問に対して、もちろんと一言おいた上でゴリランダーの腕の中からホップに向き合います。

「だって、ゴリランダー……サルノリが君たちの手に渡る前に育てていたのは私ですか」

